

禁足地の因習

麗夜の車は山道を登りきったところで、ついにガス欠になった。エンジンが苦しそうに唸りをあげ、そして静寂が訪れる。彼はため息をつくとき、スマートフォン画面を見つめた。圏外が表示が冷たく光る。

「しまったな…」

彼は車を降り、周囲を見渡す。鬱蒼とした木々が空を覆い、陽の光はほとんど差し込んでこない。地図には載っていない道だ。ノマドワーカーとして各地を転々としてきたが、こんな深い山奥に迷い込んだのは初めてだった。

しばらく歩き続けると、やがて古びた鳥居が見えてきた。その先には、

ひっそりとたたずむ村が広がっている。村の入口には、『甘神村』と書かれた木の看板がかすかに傾いていた。

「甘神村：聞いたことないな」

彼が村に入ると、そこには不思議な静けさが漂っていた。家々は古いが手入れは行き届いており、道もきれいに整備されている。しかし、人影はほとんどない。不自然なほどの静寂が、かえって不気味に感じられた。ふと、麗夜は気づく。家の窓から、複数の視線を感じたのだ。振り返ると、カーテンの隙間からちらりと覗かれる目がいくつもあった。それらは一瞬で消えるが、明らかに見つめられていた。

「ようこそ、甘神村へ」

突然、背後から声がかかった。麗夜は驚いて振り向く。そこには、背の高い恰幅のいい男が立っていた。お歳ほどだろうか。鋭い目つきだが、口元は笑みを浮かべている。

「わっ！びっくりしました」

「失礼した。村長の神野だ。珍しい客人だな。山道で迷ったのか？」

神野の視線が、麗夜の全身をゆっくりと舐めるように動く。特に、汗で少し透けたシャツの下にある、発達した大胸筋に目が留まった。

「ええ、気づいたらここに來てしまつて。車もガス欠で」

麗夜は少し照れくさそうに胸元を隠すようにした。神野の視線が、何故か肌にまとわりつくように感じられる。

「それは困ったな。最寄りのガソリンスタンドまでかなりの距離がある。今日はもう遅い。うちの村の空き家に泊まっていくといい」

神野はにつこり笑うと、麗夜の背中を軽く叩いた。その手のひらが、少し長く背中に触れていたような気がした。

「すみません、お言葉に甘えて」

麗夜が礼を言うと、神野の目が一瞬、鋭く光ったように見えた。

「いいや、それより…君は随分と男らしくて美しいな。村の者たちも喜